八木健に学ぶ滑稽俳句　20

高橋 素子

初雪やいまいましいといふべ哉　　小林一茶

しなのぢやそばの白さもぞつとする　　小林一茶

先日の天声人語で気付いたが、この11月19日は小林一茶の命日だった。江戸中興期の俳人一茶は、越後との境に近い北信濃柏原の農民の子である。そんな故郷の 11 月は冬枯れに向かう寂しい季節であり、白いものがちらつけば村人は口々に罵り、清楚な白い蕎麦の花がいちめんに咲けば、たちまちに雪に埋まる絶望の冬がやって来る。二万句に近い一茶の句には、その野性的人間性と生活が赤裸々に投影されている。

世界が涙羽生のフィギュア健闘に　　八木健

江戸の頃とは諸事情異なるが、地震・津波等で深傷を負った地域が懸命の努力で立ち上がる一方で、新たな被災の地が悲嘆にくれる。そんな復興に喘ぐ被災地の大きな期待を背負って、果敢にフィギュア・スケートに立向かっている選手がいる。仙台出身の羽生結弦だ。ＮＨＫ杯は惜しくも４位に終わったが、ＧＰ中国杯総合２位・羽生のフリー「オペラ座の怪人」の演技は、練習での衝突流血事故直後だっただけに、被災地のみならず、我が国は勿論、世界中の人々の心に強い勇気と感動を与えてくれた。

師匠はそんな羽生の姿を句に詠んでいる。４分３０秒を滑り切った羽生の美しい涙と清々しい笑顔は又、被災や復興に喘ぐ人々の大きな力と自信になった事を、私は信じて疑わない。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

師・八木健に教えて戴いた「師匠の俳句の極意」に加え、私のお粗末な知識をこの紙面をお借りして協会員の皆様にお伝えした私の拙い文章も、今回を持ちまして終わりにさせて戴きたいと思います。

そこで勝手ながら、今回は趣向を少し変えさせて頂き、私が感銘を受け学ばせて戴いた師匠や皆様方の滑稽句を独断と偏見で列挙させて頂き、この章を終わらせたいと思います。（順不動）

大根を地球と奪ひあつてゐる	八木健
蝉殻を脱ぎつつあればセミヌード	八木健
秋天をいけどるやうに投網打つ	八木健
落ちたけど東大受けたほどの子よ	八木健
首たてにふつて納得ゆかぬ驢馬	八木健
とつくりのセーターを編む首つ丈	八木健
うごくお花見吊革につかまつて	八木健
よくしゃべる後姿の大根干	八木健
一匹の離脱もなくて鰯雲	八木健
トラックがもの言ふ寒さ曲がります	山本賜
風鈴を上五に吊し風を待つ	可知豊親
不景気は地球の外へ初箒	西本幸一
人妻をしかと抱きしめ村芝居	魚田裕之
ここだけの話の漏れるおでん酒	安居雅寿
御慶述ぶインターホンに一礼し	柳紅生
吾輩も猫でも飼ふか漱石忌	有吉堅二
股つかみパッチの乾き確かむる	田代青波
母の指借りて足し算菖蒲風呂	鏡淵和代
行きがけに燃ゆるごみもち初仕事	原田曄

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

醜聞は村の活力生身魂	横山喜三郎
家流る座敷童は無事だべか	池田亮二
杖突いて杖つくさくら訪ねけり	飛田正勝
耳元の蚊は献血の泣き落とし	西をさむ
左遷にも添ひ来しコート捨てられず	清水呑舟
俳人が無理やり鳴かす蚯蚓かな	飯塚ひろし
法師蝉言語明瞭意味不明	稲沢進一
噴水や落下の恐怖頂点に	久我正明
彼の世へと顔見世デビュー中村屋	百千草
かけている眼鏡を捜す春愁	麻生やよひ
嘘して美人不美人なかりけり	久松久子
外泊の夜はひとり寝の竹夫人	前川敏夫
裸婦像の乳房ばかりに降りる霜	壽命秀次
襖越しの会話今のは震度四	永井弘子
蚯蚓出て五部の魂一寸に	永島薫玉
落雲雀空におしゃべり置き忘れ	小林英昭
口閉じて顔取り戻す燕の子	金澤健
春眠のついでにあの世垣間見る	白井道義
猫の恋死ぬの生きるの引つかくの	柊ひろこ
嫌なもの奥へ奥へと冷蔵庫	有富洋二
生身魂またはじめから話し出す	越前春生
サングラス余計目立つてしまひたる	加藤賢
マネキンも一枚脱ぎし薄暑かな	渡辺さだを
尻音のポンと響けば西瓜買ふ	井口夏子
本当は蟻より利口きりぎりす	藤森荘吉
地獄絵の釜の中なるこの暑さ	藤原セツ子

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

北窓を開ければ向かひは南窓　　津田このみ

完熟の桃のおしりの皮をむく　　高橋真紀子

前回の 55 回の「インタビュー」に加えての足掛け 6 年余りのお付き合い、本当に有難うございました。また、皆さまと何処かで私の拙い文章でお会い出来ればと願っております。

最後に八木健先生に心よりの感謝と「滑稽俳句協会」の益々のご発展、皆様方のご健康とご活躍を心よりお祈りしながら、ペンを置かせて頂きます。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。